哲學研究　第四百四十七號　第三十九卷第一冊

世界文化の生成

——文化變動に見られる通則性——

ジュリアン・H・ステュワード

一　東と西・世界文化の生成

第二次世界大戰以來、國際間の理解が絶對に必要であるということは多くの國民にとつて自明の事柄となつた。しかし、如何にしてそのような理解に到達するかということになれば、それは極めて困難な問題である。英國の帝國主義的詩人 Kipling の「東は東、西は西、二つは永久に相會わじ」という言葉に見られるような悲觀的な考えが多くの人々の間に行き渡つている。例えば Ruth Benedict の「菊と刀」は西洋に向つて日本人を説明しようとするけれども、それをどれだけの人が讀み且つ理解したかということは疑問である。なるほど哲學者達は、高邁な目的を以て遙かに相隔たる東西世界觀の相異を調和しようと努めては來たが、しかも數千年の傳統に根ざした文化と文化の間には依然として深刻な相異が横わつている。

この報告は、過去の歴史から派生した文化乃至イデオロギーの相異よりは、むしろ將來の傾向を問題とするものである。數千年の歴史のうちにそれぞれの發達を遂げた外國の歴史は最善の努力を以てしても尙且つ近似的理解を超え

ることは不可能である。この報告の論點は、いま新らしく生成しつつある世界文化の共通の基盤の上に東と西がはじめて相會しつつあるという事にある。この文化は本來、主として西洋の產物ではあつたが、しかし乍ら既に文字通り世界のあらゆる國民の財產となつている。この文化は東西の間に蟠る傳統的な相異を解消するものではないが、むしろ、それらにとつて代るものである。この新らしい文化も相剋をうちに含んでは居るが、それは世界の異る地點の間よりも、むしろ過去と未來の間の相剋である。

國際文化の概念は、世界政府の設立に向おうとする政治的意味での「國際主義」と混同してはならない。勿論、國際間の合同は現代の諸傾向が持つ效果の一つではあろう。人類の歷史は明らかに、先史時代以來、競い合う小社會がより大きな統一した國家に合體して行く歷史であつた。しかし、われわれがより多くの關心を寄せるのは、今日すべての國民に影響しつつある諸因子を明確にすることにある。それらの因子は逞しい新種の植物が花園の中に他の植物を押しのけてはびこるように、傳統文化を覆いつくそうとするのである。

東西の接觸と相互作用は文化史上の主要な各時代において、その性格に深刻な變化を示して來た。人類がはじめて文化を造り出した古石器時代の初期においては、一つの社會に生れた新機軸は必らず他の社會に傳播した。發明と傳播という相互補充の過程が常に働いた結果、いずれの文化も他の文化によつて內容を豐かならしめられたのである。六〇〇〇年乃至七〇〇〇年前にはじまつた新石器時代には、文化的發明の機運が促進されていた。近東地方は栽培植物としての小麥、大麥、燕麥、家畜としての牛、羊、または冶金方法、數學、文字その他を以て世界文化に貢獻し、極東地方は米、磁器、火藥、絹、および磁石をもたらした。しかし當時の世界には文化の上での東洋と西洋という區別は存在しなかつた。無數の地方的な社會がそれぞれに生活の仕方を發達させたのである。

中世に至るまで、世界文明の中心地となつたいくつかの地方は主として農業を營んでいた。いずれも土地とその產物の所有または支配、及び嚴重な階級區分に基いて相等に安定した社會經濟的なパターンをつくり上げた。そのよう

な體制に基いて發達したイデオロギー、宗教、哲學は、逆にまたその體制を聖別し、支持したのである。本質的に傳統的、且つ保守的な社會が存在したのは東洋に限らない。中世の、封建的、カトリック的歐洲は東洋の儒教的支那に劣らぬほど傳統的であつた。商人や金錢を扱う人は兩方の社會で輕蔑すべき身分とされた。このような社會で傳統的な階級構造を維持するために、如何なることが行われるかを示す歴史上の實例として、十三・四世紀のスペインで行われたユダヤ人やムーア人に對する虐待にまさるものは恐らくないであろう。虐殺も、拷問も、追放も、スペインでは異教徒を取り除くという口實のもとに行われたのではあるが、實際は商人の集團が勢力を增大して從來の社會構造に變革を來そうとしたことに對する反撥であつた。

人類の歴史の初期にあつては、地方的消費のための農業に基く社會が多く、主として國際間の交易に基礎を置いたというような社會は稀であつた。商業的社會は通常、海に面した地方、あるいは島嶼に見られた。それらの地方では海上の交通路が遠隔の地域との貨物の運送や交換を促がしたのである。たとえばフェニキア、ギリシヤ、クレク島がそれである。しかし、それにもかゝわらず、北歐にはじまつた海上貿易が新らしい産物を求めて全世界に亙る航海を開始するまで、世界の大部分は、歐洲をも含めて地方的な土地とその産物に縛りつけられた儘であつた。

東西の關係に新局面が開かれたのは、マルコ・ポーロが十三世紀にアジアから歸り、東洋の驚異を記述してからである。遠隔の土地また未知の人人に對する興味はそそられたが、引續いて起つた所謂大發見時代の歐洲人の航海は、はじめて遭う人人を理解することよりも、むしろ香料、絹、金、その他の珍らしく、また役に立つ産物を持ち歸ろうという願いに動機ずけられたものであつた。貿易だけならばお互いの文化について無知な人人の間にも行い得たのである。

歐洲が世界貿易に先鞭をつけたが、行くさきざきの人人からその産物を得るために計畫された彼等の探險はやがてその人人を征服することとなり、巨大な帝國の建設となつた。はじめ、これらの帝國は貢納物の取得を目的とし

て計畫された。例えば、スペインも英國も共にその植民政策は、先ず間接統治の制度を用いたのである。その場合 caciques, maharajas, chiefs 等と呼ばれた土着の首長たちは賦課物を集めることを要求されたが、各地の文化の傳統的なパターンは出來る限り妨害しないようにした。

今日「西歐文化」と考えられているものは今から五世紀乃至六世紀前、北歐の人人が農業的、封建的傳統のカラを破つたときに現れはじめたのである。この所謂「歐化傾向」の頂點はまさしく「産業革命」と呼ばれるところのものであるが、その理由は、このことの速やかな展開、歐洲ばかりか、およそ、その到達した到るところの人人に與えた強い影響、そこから急激な變化を示して現れた新らしいパターンなどが古今未曾有のものであつたことにある。

勿論、北歐の人々は全面的に新らしい文化を他から孤立して創造したのでもなく、また彼らに特別な天才の遺傳があつたのでもない。世界の他の諸地方に偉大な農耕文化が發達した時代に、歐洲は常に邊境にとどまり、極めて原始的でさへあつた。農耕技術、冶金術、文字、數學その他の學問、科學を歐洲は古代の灌漑文明から得たのである。ギリシヤとローマはこの文化遺産に人と宇宙とに關する世俗的思辨を加えて内容を豐富ならしめ、合理的思想への先驅的な役割を果した。アラビア人の世界から内容豐かな寄與を受けたルネッサンス時代に、學問は更に前進した。

北歐において傳統のカラを打ち破つた主要な因子は新らしい經濟であつた。大西洋や北海に面する國國は、逞ましい mercantilism を發達させた結果、富裕な商人の新らしい階級が傳統的な二つの階級からなる封建社會の構造の間に進出したのである。重農的なスペインでは商人階層を排除したが、北歐では商人階級を中心とする全く新らしい社會文化的組織を作り上げた。以前には輕蔑された商人たちは高い社會的地位と大きな勢力とを獲得した。進取の氣象と能力さえあれば、誰人も榮光かゞやく地位に上ることが出來た。土地との關係に基く「高い生れ」、「低い生れ」という傳統的な區別は弱まり、商業の重要性が增したことによつて社會的地位の變動が可能となつた。

傳統的な社會經濟制度の破壞に引き續いて、新らしい物の考え方、新らしいイデオロギーの體系が現れた。プロテ

スタントの改革が産業革命に伴つたのである。個人は自らの努力によつて社會的、經濟的地位を築くことが可能である以上、同樣に自らの行爲によつて神の前にも價値を認められるであろうと考えられた。古いカトリシズムにおける複雜な儀式や、神と人との間の仲保は、個人とその神との直接の契約を考えるイデオロギーによつて置き代えられた。

古い農耕文化のパターンが粉碎されたことはこのほかにも未だ多くの影響を殘した。個人の地位が永遠に續く宗教的秩序によつて固定されるのでない以上、また新らしい生産方法が利益を齎すことが證據立てられた以上、人は自分をとり卷く宇宙の性質を研究し、また實驗を試みようと欲したのである。哲學的思辨が宗教的獨斷にとつて代りはじめ、やがて來るべき科學的研究の時代に向つて道を開いた。事實、合理主義は極めて廣く行われ、多くの哲學者は理性によつて、自然の秘密を解くと同樣にあらゆる社會の問題をも解決し得ると信じていた。

産業革命に地理的意味で「西洋」という形容詞を用いることは困難である。南歐は永く農耕的、封建的な狀態に止つた。南北アメリカのほとんど三分の二を占めたスペインの帝國は極めて封建的であつたし、十九世紀のはじめに次に次にラテン・アメリカの諸共和國を解放した獨立戰爭も直ちにこのパターンを破壞することはしなかつた。今日ですら、多くの農村地域に極めて封建的な hacienda と呼ばれるスペイン風の農園が殘存している。所謂西洋文化とは、實際には英國、オランダ、ベルギー及びドイツに發達した商業的、工業的文化の謂である。

世界の他の地方に對する西洋の影響がより強く現れたのは、北歐の國國が植民地を工業生産物の市場となしはじめたときである。スペインはその帝國内における商業を常に嚴重に制限していた。しかし、その他の植民地では、土着の人人の間に、自らの生活必需品と貢納物の生産から交易用物資の生産への急速な變化が見られた。換金物資の生産はそれぞれの資源や生産過程の性質によつて種種の形態をとつたが、いずれも、農村の人人の土地保有、家庭生活などの社會構造に深刻な變化をもたらし、商人階層さえ現れはじめた。

歐洲において産業革命が進むにしたがつて、從來農耕を行つていた植民地にも工場や加工場が建設されるようになつた。印度の織絆工場、南アフリカの鑛山、多くの地域の砂糖工場、ブラジルの製鐵所、イラクの精油工場その他無數の例を擧げることが出來る。普通、工業化は外國資本によつて始められ植民地の土着民の發言權は殆どなかつた。しかも、一度工業化がはじまると、それはいずれの場合にも極めて類似した一連の文化の變化をもたらした。

工場には管理を行う者、技術者、勞働者、信用組織、運輸組織などが必要となつた。實業家、銀行家、種種の專門家、賃金勞働を行うプロレタリアートなどの新らしい階級が、土地の所有者と小作農民という古い階級と交替した。都市は政治や宗教と共に、金融、製造工業、市場、教育その他の新らしいサーヴィスの中心地となつた。

工業化に伴う內部の變化は傳統的なパターンと激しい摩擦をひきおこした。これらの變化が北歐におこつた變化と極めて類似していたからである。廣範圍に見られた工業化に對する反動は傳統主義の復活と文化的國家主義の强力な生長であり、これらは見かけ上、西洋の影響を排擊し、古い諸價値を復興しようとするものであつた。しかし乍ら、實際は經濟的、政治的獨立への衝動、商業の發達が齎らす利益を保持しようとする願望がこの國家主義と結びついていた。商業上の利益はこれまで外國の資本家たちによつて國外に持ち去られていたのである。かくして最近の二十年間、殊に第二次世界大戰以後においては、曾つての植民地が次次に獨立し、または commonwealth としての地位をかちとつた。メキシコ鐵道やイラクの石油の場合のように、外國資本を排除して國民のものとすることを得なかつたところでも、强い統制と重い課稅の對象となつた。

國家主義の擡頭は決して單純に工業化の本來の否定を意味するものではない。反對に、それは各國民が自分の國の工業や商業を支配するために、より完全な主權を確保しようとするものであつた。そのような主權が可能になつたのは、これら諸國家の大部分が産業文化を十分に同化した結果、もはや外國の支配や介入を排除してもその文化をよく發達せしめ得るに至つたからである。

しかしながら同時に、政治上の獨立は、すべての國國の間の、より大きな經濟的、また知的な相互依存關係をもたらすものであつた。工業の進歩を可能ならしめる科學知識は文字通り國際的なものである。科學は自然法則に關するものであつて、特定の文化のイデオロギーや價値體系に關るものではない。自然の秘密とその産業その他の必要に應えるための應用ということは、あらゆる國の科學者によつて研究されている。このことは、日本の理論物理學、光學植物發生學、造船等の分野での進歩が如何に世界文化に貢獻したかを考えるだけでも明かである。

産業發達のための基礎として、またより高い教育を受けた人口が必要となつた。教育、社會階級の再編成、および國家の權力構造の變化は、選擧權の範圍を擴大し、政治的に民主主義化する傾向を示して來た。

この新らしい文化は「西歐的」と呼ばれ、その傳播の過程は「西歐化」と言われて來た。特にマス・コミュニケーションや近代的な交通機關があらゆる民族の相互接觸を容易ならしめるようになつてから、西洋の思想や慣行が大量に傳播したことは事實である。

産業文化が多少とも世界の他の地方より進んだ西洋から、物の考え方、政治の方法、産業計畫、或いはまた衣服や建築や美術などの型の傳播が見られることは或る程度まで事實である。しかし乍ら、世界の變化の過程が單に歐洲やアメリカの習慣を借り入れることだというならば、それは餘りに單純な分析である。現在われわれの到達した歴史的地點にあつては、例えば日本のような東洋の國國が自らの力を以て逞しく前進しているのである。日本は多くの西洋文化の産物や思想を輸入しているが、西洋との間に見られる類似性は決して單なる模倣の結果ではない。日本では、例えば、公共建造物、大きな店舗、工場などの建築は傳統との鋭い斷層を示し、むしろ西歐建築に類似している。しかし乍ら、このような建築は、傳統的、美的、嗜好に應えるよりは、寧ろ實際的必要に應ずるべく設計された構造を示すもので、機能的であるという點において、全世界に共通なのである。所謂モダンアートもまた普遍的類似性を示している。この藝術の大部分は私にとつて全く理解し得ないものではあるが、それにしても、傳統を打破しようとし

て慎重な努力をしている點はいずれも共通であるといいたい。それは現代個人主義の一つの表現である。それは藝術家自身のほかの誰人かが彼の仕事を理解するか否かという點に關して、全く無關心なのである。個人主義が一個の文化價値となつた證據である。

今日、生成しつつある世界文化は西洋の獨特な貢獻物であることをやめ、世界のあらゆる國民共通の財産、新遺産また創造物となつたのである。この國際的な文化は人類の歴史において新らしい性格を獲得しつつある。

第一に、今日においては、すべての國家や國民の間に前例のないほど強固な相互依存性が存在している。未開社會の人人は、弓矢あるいは農耕技術などの側面において、共通の知識を持つとしても、しかも全く獨立した社會に隔絶したままであり、それぞれにおのが住む地方の資源に依存するのである。しかるに、今日の産業化の結果、地球上あらゆる地方の産物を用いることが必要となり、地方的環境との關係は過去の技術の狀態におけるとは比較にならないほど少いのである。

第二に、近代的生産方法の以上の如き特徴の結果として原料と加工物の市場に關する協定を通じて遠く隔たる社會が相互に結びつくこととなる。この相互依存性は競爭を引き起すであろうが、競爭もまた文化の地方差を減少する有力な因子である。

第三に、これが最も重要なことであるが、今日の産業文化は相互に密接な結合關係にある多くの要素の尨大な複合體から成つている。その要素には、科學的知識、生産技術、商業組織、都市化、專門化、階級の再編成、その他なお多くのものがある。産業複合體は事實、ほとんど文化の全側面を包含するほどの組織なのである。

この講演では、從來それぞれの國民が保持し來つた諸制度を變形させるであろうと考えられる主要變化の幾つかをスケッチしたにすぎない。この文化は科學や技術に基礎を置くといえるであろうが、生活や文化に全く合理的な方法と名ずけられるようなものがあるという考えに私は決して同意するものでない。人間の持つ種種の價値は個人的であ

り、且つ自由に定め得るものである。たゞ私が、異る諸國民の文化が互いにより類似したものとなると論じ來つたように、これらの價値は次第に相似たものとなると考えられるのである。國際的文化の生長は必らずしもすべての人人の文化を單調な一つのものにしてしまうものではない。工業化の結果として都市の住民の間にも農村の住民の間にも多種多様な新らしい subcultures が生れつつある。次回の講演においては、そのような新らしい型の幾つか、殊に世界中の農村において、傳統的に異る諸文化の間に共通に現れつつあるいくつかの型について考察しようと思う。

二　變貌する現代諸文化の中に規則的に現れる共通の性質

私の最初の講演は生成しつつある世界文化の概念を扱うものであつた。この文化は主要な要素から見て、最も廣い意味での産業的と呼ぶべきものである。

人類の諸集團の行動に興味を持つ人類學者の一人として、私は一個の國際文化という概念に到達したのであるが、それは謂わば底から出發してそこに至つたのであつて、反對に上から出發したのではない。たとえば未開社會や、近代の國家の場合にはその中の種種のコミュニティの研究から出發するのであつて、國家全體の歴史から出發するのではないのである。またそれは何故に世界を通じて常民の生活に變化が生じたかを確めようとした結果そこに到達したのであつて、國家大の經濟制度、政治制度または宗教制度を分析した結果ではない。

人類學はたしかに人類の初期の歴史の研究から出發したのであるが、若し人類學者がその研究對象を近代産業世界との接觸を免れた社會にのみ限るならば、やがてその對象が消失してしまうであろうということは既に早くから明らかであつた。今日なお原始以來の傳統的生活を續けている未開社會は恐らく半ダースにも滿たないであろう。

土着の社會が以前にどうあつたかということでなく、今日いかにあるかということを理解するためには、世界の商

業貿易、產業の發達また政治の對象となる地域擴大というようなことに注意を拂うことが必要なのである。このことからわれわれの用いる文化の概念が非常に擴大されることになり、その結果しばしば人類學は他の社會諸科學と如何に異るのかということが問われるのである。これは或る程度まで當然の質問である。

今日、全世界に見られる文化變容の中で異る文化を通じて規則的に現れる特徴が幾つかあるが、私の關心の焦點は、主として近代產業化の影響のもとに新らしい文化を發展させつつある土着の人々の社會の上に注がれている。これらの社會が今日近代的な國家の中に包攝され、それら國家の諸制度によつて影響される有樣を概念化する仕事は、最初、一九四二年から一九四六年に亘つて、私がスミソニアン・インスティテューションの社會人類學研究所長をしていた間に一應の輪廓が描かれたのである。この期間にペルー、メキシコ、ブラジル及びコロンビアの調査研究が行われ、土着のインディアンの社會がこれらの國家の subcultural groups とか國家內の少數民族と呼ばれるものとなつて行くすじ道を明らかにしようとしたのである。研究成果が全體としてどのような性質のものであつたかは研究所の出版物に示されているとうりであるが、今から思いかえせば、これらは分析的、說明的と言うより、むしろ記述的であつた。問題點は明らかであつたが、理論的觀點は充分に展開されていなかつた。

その後、一九四八年から四九年にかけて、同僚達と一緒に私がプエルト・リコの五つの cultural groups に關して行つた調査は、おなじく subcultures や subsocieties に對する國家的諸制度の影響の研究を志したものであるが、その計畫は以前のものよりよく考えられたものであつた。二百萬の人口を持つプエルト・リコは合衆國に屬する一個の島嶼であり、全體としては、同じ國家大の法律、經濟力、その他、一般的な文化——これらはすべて產業時代の文化複合によるのであるが——の影響を受けているのであるが、それにもかゝわらず地域によつて異る subcultures が出現したのであるから、われわれはその理由如何という問題に當面したのである。

製糖會社のプランテーションに働く勞働者、haciendas と呼ばれるコーヒー農園の農民、市場用の蔬菜や煙草を栽

培する小規模ではあるが獨立した農家の人人、更に上流階級をも含めて種種の都市的集團、これらの間には鋭い文化の相異が見られた。これらの集團はすべて合衆國、およびプエルト・リコの諸都市から同種類の文化の傳播を受けることが豫想されるのであるから、地域によつて異る subcultures の原因として各地域の生産組織（productive arrangements）の相異が主要な決定因子であると結論せざるを得なかつた。

この結論は一つの國家なり、總合的な地域なりのうちにあるコミュニティの研究に關し從來の觀點を修正することになつた。プエルト・リコの調査を始めた時には、農村のコミュニティは、いずれもみな同樣にこの島の典型を示しているといわれていた。二十年前に John Embree の「須惠村」を讀んだときに、私はこの村が稻作を行う日本中の村村をそのまま、代表するものと考えていたのであるが、プエルト・リコで言われたことも、それと同じであつた。しかし、結局、プエルト・リコのいずれのコミュニティをとつても、プエルト・リコの文化の全體をすべて代表するごときものは存在しないことが明らかとなつた。個人の行動樣式や子供の育て方に國民全體に共通するところがあるといつて所謂「國民的性格」を云々する考え方は恐らく一個の神話に過ぎないであろうということになつた。

製糖會社のプランテーションに働く賃金プロレクリアート、互いに甚しく孤立して小規模な農業を營む人人、コーヒー産出地域の傳統的に無知、貧窮な農民――というごとく地域的に相異する subcultures は主としてそれぞれに特有な生産組織に對應して發達したのであるから、これらに類似した生産組織が見られるところであれば、世界の他の地域においても同樣に類似した subculture の型を生みだすのではあるまいかと考えられた。

また、プエルト・リコでは大小の都市が發達したことから、銀行家、卸賣商人、富裕な地主、商人、また醫師、辯護士、敎師、政府の役人などのような專門的職業人、賣子や給仕人などのようなサーヴィスをする人人、建築工、機械工、賃金勞働者、失業者、或いは近代産業社會では職業につくことの出來ないような人人、という風に多くの特殊な subculture を持つ集團を發達させたのである。このことは、都市の發達が世界の他の地域でも同樣にそれぞれ特

殊な集團を發達させるであろうことを期待せしめた。

一九五二年には、以上述べたごとき豫想をもつ研究を續けるために私はイリノイ大學大學院の研究教授となつた。「種々の文化の變化する際に規則的に現れる共通の性質の研究」（"Study of Cross-Cultural Regularities of Change"）というイリノイ大學の研究計畫は次のような想定に基礎をおくものである。卽ち互いに異る國民であつても、その中の特定の部分に同種の文化變容（acculturation）を起す因子が加わる場合には國の相異を超越して類似の變化が生ずるであろうというのである。このように簡單な命題の形で表現すれば、自明の事柄に科學の衣を着せたにすぎないとも見えようが、これを實際に世界中の多種多樣な土着の文化に適用するとなれば、無數の複雜な問題を含むことになるのである。

三年間に亘つてわれわれは文化變容について知られている事柄を、世界大の立場から見て意義があると考えられる幾つかの地域において調査し、種々の文化に共通に展開しつつあるように見える型の假說を立てた。卽ち、いくつかの因子の特定の組み合せの結果として遠く隔たる地域に獨立に現れる類似の型である。これらの型ないしは實驗のためのモデルとも言うべきものは今後フォード基金からの助成金による現地調査によつて追試される筈である。

調査地域としてはメキシコの西北部、中央アンデス、西アフリカ、東アフリカ、インドネシア及び日本が選ばれている。日本における調査はアメリカ研究セミナーの主催のもとにイリノイ大學からの補助金を加えて開始されたのであるが、現在は既にフォード助成金によつて繼續されている。來年度においては、より大規模に實施される豫定である。

研究の目的が、種々の文化の中に見られる共通の型という假說の正否を確めることにあるのであるから、既にそれが實在するごとき豫想をすることは時期尙早というべきであろう。しかし、われわれが期待している結果が如何なるものであるかについては述べることが出來るのである。

土着の人人の文化に生ずる變化の窮極の原因は今日生成しつつある世界文化乃至産業文化である。産業化のうちに見られる改良進歩は單に全體としての國民の經濟的、政治的、知的及び宗教的な文化の型を變形させつつあるばかりでなく、同時に、各國民を構成する、例えば農村集團、職業集團、民族集團などの如き subculture を持つ集團の生活にも深く浸透して、斷えずまたあらかじめ豫想し得る如き仕方で集團の生活を變化せしめつつあるのである。

われわれの研究は、勿論、變化の原因を求めるために國民全體に亘る諸制度を問題にするが、しかし主として關心を有するのは subculture を持つより小さな集團である。われわれは一國民全體の文化と、その國民を構成する人口の各部分の subcultures との間に一定の相異があると考えるのである。

今日、各國民のうちに生成しつつある産業文化は互いに關係し合う幾つかの特徴的な要素から成つている。例えば一定の體系をなした科學的知識、その知識の人間的な目的のための應用、就中、工場や農業生産の發達、互いに特殊な發達を遂げた地域間の物資の交換、銀行、會社、貿易上の取り決めなどの如き商業制度、旅客・貨物を運送する列車・船舶・飛行機、その他の各國民それぞれの文化上の産物およびそれらを傳播する方法などである。

しかしながら、このような國家大の文化の特徴を示す諸要素は、必らずしもその國民中の個々の市民の行動や知識や價値意識を說明するものではない。大方の市民の間に見られる文化の變化には基本的に相異る二つの傾向が存在する。第一には、産業からする諸因子の結果として全ての人々が或る程度類似の變化を行うのである。第二には、種々の因子の特殊な組み合せが働きかけるところに、それぞれ相異る subculture を持つた集團の型が出現するのである。

文化變動の傾向が互いに最も似通つているのは文化の中心地として發達しつつある都市においてである。このような中心地には生産を支配する會社の重役、銀行家の階級、高度の訓練を受けた技術者達、熟練工、不熟練工、卸賣業者、小賣業者、船舶業者、仲買人、その他の産業生産物の賣買に關係する人人、その他なお多くの種類の專門的職業に從事する人人である。

農村の人人もまた到るところ大體おなじような一定の仕方で變化する傾向を持つている。曾ては自給のための食糧その他の必要品を生產していた社會が次第により大きな世界に從屬する部分と化して、しかももはや再び元の姿には歸らないのである。いくつかの廣く用いられている概念が以上の世界的傾向を表現している。

「個別化」(Individualization) というのは從來の資源の共同所有や集團活動の樣式が破壞し去り、個人個人が現金收入を目ざして市場向生產を行つていることを意味するものである。今日存在するものは個人の所有と競爭である。個別化と關係のある "disorganization" という概念も同樣に傳統的な patterns が破壞し去つたことを表現するものである。

しかし乍ら individualization や disorganization に對して別の局面も存在する。"reorganization" という概念は次のような事實を表現するために用いることが出來るであろう。卽ち、Redfield が "folksociety" と呼んだものは破壞されても、その構成員たちは生產や交換のための集團乃至組織という點に關し、曾ての地方的な活動に代つてより多く國家的な活動を行うのに都合がよいように謂わば再組織されているのである。

產業化のもう一つの一般的影響に 'secularization' (世俗化) がある。宗教的因子が各地のコミュニティーの團結を强めるということから言えば、世俗化乃至宗教的信仰の失われることは disorganization や individualization を促進するものといえるであろう。しかし乍ら同時に、古い形式が新らしい機能を果すために生き殘るということもあり得るのである。ラテン・アメリカにあつては古いコミュニティーは年間五十日乃至六十日もカトリックの宗教的祭日を守る習慣を持つて居た。今日これらの祭りは宗教的禮拜のためよりはむしろダンスその他のレクリエーションの機會となつているが、それもまたコミュニティーの活動であることに變りはない。

世俗化は日本にも見られる。ここでも同樣に古い形式が新らしい機能を果すようになつている。宗教的沈潛のための巡禮はしばしば寺院見物のレクリエーションの旅に變つているのである。

しかしレクリエーションの領域には、人人を更に直接に外部の世界と結びつける如き集團活動の新らしい形式が見られる。映畫、ラジオ、スポーツ、その他種種のコンテストがある。多くの場合に從來の宗教的な集團組織はこれらの新らしい機能を取り入れることであろう。

更に一つの世界的傾向は"urbanization"であるが、これは單に都市の成長ということ以上の含蓄を持つている。それは商業、保健、教育その他の政府のサーヴィスの中心が發達し、それが益〻多く田舍の人人によつて利用されることを意味する。それはまた、新らしい行動樣式の源泉があつて、その行動樣式が個人的接觸やその他の經路を經て田舍に傳播することを意味する。

さて以上の如く一般に通ずる傾向が存在するにかかわらず、國民中の異る部分は互いに異る行動樣式、言いかえればsubculturesを獲得しつつある。村落集團の場合も、職業集團の場合も、一つで國民文化の複雜を極める全要素に關與することなどあり得ないのである。

今日、出現しつつあるsubcultureの型はその數が極めて多く、ここで說明することが出來るのは今後三年間の現地調査でわれわれが研究しようとしている假說上の主要な型のいくつかに過ぎない。

日本のことからはじめるならば、これまでの調査で既に稻作農民の著しく明瞭な且つ安定した型が現れているように見える。家族單位で一定の土地を保有し、使用することは明らかに日本の歷史の大部分を通じて變らなかつた。稻作には機械化が困難であることから、これらの土地は主として手勞働によつて耕作されて來た。

このような農村の人々は"small farmers"（小規模農業者）と呼ぶことができる。何となれば法律的所有關係の形式が種種の變化を示したに拘らず家族單位の農地保有、耕作權ということは變らず、自ら土地を保有しない單なる勞働者による耕作が少いからである。

然るに以上のような日本の狀態を同樣に機械化されないままの農業が行われている世界の他の地方と比較すると、

重大な相異が見られるのである。プエルト・リコの山地で蔬菜や煙草を栽培している農民も日本と同じように手勞働による耕作を行つている。しかしながら、プエルト・リコには若干の大土地所有者があつて、これらが土地を耕作させるために多くの賃金勞働者を傭つているのである。

この相異を說明する一つの鍵は相續の仕方にあると思う。日本では長子相續が行われたために家族單位の土地使用という習慣が保たれ、プエルト・リコでは均分相續のために農地の細分化が行われたのである。或るものはもはや一家の生計を保つにも足りないまでに細分されて、遂に大地主に賣られてしまつたのである。

したがつて、他の地方に見られる如き巨大な、機械化された會社組織の農業に較べれば、プエルト・リコの場合も日本の場合も所謂小農"small farmers"の部に分類されるであろうが、この兩者の間の相異もまた說明を加える必要がある。その說明は農家乃至農場そのものを比較するよりも、恐らくむしろ國家大の制度を較べることによつて得られるであろう。

以上の事柄を念頭に置きながら、われわれは各地方間に見られる土地の相續方法のちがいが何故生ずるかという理由をそれぞれの地區を包含するより大きな社會に照して考察しようと思つている。

日本の稻作農家の問題もまた東南アジアのそれとの比較を促すものである。東南アジアにおける水田耕作の技術は日本のそれと可成りよく類似するように思われる。しかし他の方面には異る特徵も見える。例えば長子相續よりは均分相續の方が普通のようである。更に重要と思われるのは、東南アジアは永年に亙つて植民地であつたために、その農產物も地域內の需要にこたえるよりは寧ろ大部分外國市場へ輸出するためのものなのである。

したがつて東南アジアにあつては農民達にとつて外部にある諸因子が農業の型に對する決定的役割を持つであろうと思われる。すなわち、同じ水田耕作でありながら日本のそれと東南アジアのそれとは外部のより大きな社會との關係のために可成り異つた型を示すであろうと考えるのである。

全體としては異る文化の中に見られる共通の型の中で世界のマーケットを目指してただ一種類の産物のみを耕作するところの、大資本力を持ち、且つ屢〻外國の支配を受けるプランテーションは大いに研究を要するものである。この型の農業は種種の特産物を生産して居る。例えば砂糖、ゴム、カカオ、コーヒー、麻の類、木綿などを擧げることが出來る。

この所謂 monocrop plantation では土着の民衆は賃金勞働者の立場に立たしめられる。この型の研究のために取り上げたモデルはプエルト・リコの製糖會社のプランテーションである。われわれは今後西アフリカのカカオ生産、東アフリカのコーヒー、東南アジアのゴム、ペルーの綿花や砂糖などが類似の subcultures をもたらしたか否かを確めようとしているのである。

土着の人人の間に見られる農業以外の企業も互いに類似した subcultures を發達させているのではないかと思われる。その實例と見られるものに南アフリカやペルーの鑛山業がある。

所謂 cross-cultural regularities は以上のほか從來の自給用農産物に加えて近年に至つて換金作物の栽培をとりいれた土着民の間にも見られるであろう。彼らを無知で貧しい農民を意味する"peasants"という名で呼ぶのであるが、それは彼らが昔ながらの文化を溫存し、國家大の制度が持つ文化に同化することが少なく、未だ文字の發明されない時代に見られる如きコミュニティを持ちつづけているからである。

peasant と呼ばれる農民たちの中の重要な subtype にメキシコや中央アンデスの、過剩人口をかゝえながら、しかも生産力の乏しい地域に見られる所謂"corporate type"(團體型)がある。この型の特徴は傳統的文化、强い仲間うち感情(in-group feeling)、孤立主義などにある。この型も世界の他の部分にも發見されることが期待されるのである。

他の一つの subtype は"detached"と呼ぶにふさわしいバラバラな半ば水草を追うような型の peasant である。

この型はブラジルやパラグワイの熱帶森林地帶に見られるように人口が少く土地の豐富なところに現れる。corporate peasant と對照的にこの型は村や集團に余り結びつきを持たない。彼らは自由に動きまわり、畑をつくりたいと思つたところを開墾するのである。當面の目的のために貨幣を獲る必要があれば、その間だけ貨幣經濟の企業に備われもするが、永續的雇傭關係は嫌うのである。

その他の subtypes には、天然資源その他當該地域が持つ潜在的經濟力を完全に發揮させるためには土地の人人の信用能力も技術水準も不充分であるようなところに近代經濟が發達しはじめる場合に、中間的段階として現れるものがある。メキシコの西北部やスマトラの東部には土地の潜在能力といい、交通條件といい、更に輸出すべき市場といい、充分に資本を投入すればプランテーションの經營を行い得るような地域がある。しかるに自ら充分な資本の蓄積もなく、經營の技術も持たぬままに、大部分の土着民は彼らの土地を外國の會社に譲渡し、自分は勞働者としてその土地で働いているのである。

以上に述べた如き種種の生産組織から結果する文化の型を理解することは、そのもたらす實益という點から見ても過當評價することが出來ないほどに重要なのである。種種の變化が、私企業によつてもたらされるにしても、政府の技術援助計畫によつてもたらされるにしても、それが當該地區の土地保有制度、家庭生活、社會關係、宗教の形態、政治的態度などに及ぼす影響はいずれの場合も極めて深刻である。古い文化價値は新らしいものと代り社會的地位の間にも交替がおこる。これらの變化が今日の國家主義的運動の基礎をなしているのである。

所謂技術援助計畫は、合衆國のそれにも見られるように、未だ會つてないほどの善意に動機ずけられているのにかかわらず、實際には援助者の意圖が理解されるよりは寧ろ惡意を招きかねないのである。その理由は彼らが傳統的な文化のパターンを破壞するばかりでなく、屢〻大量の土地を持たない賃金勞働者の階級をつくり出し、これらの階級が自らの家庭から、また生れついた社會集團から引き離されるところにある。

このような援助計畫は、實際、大規模に社會科學を應用しているのであるが、なおそこに缺陷があつたのである。即ち彼らは文化變動に對する科學的洞察を缺き、彼らの行爲の影響するところを豫想する能力を缺いたのである。この點から見れば、今日の世界の鬪爭は軍事的である以上にイデオローギッシュである。こうした計畫の運營者達は、國際關係が單なる支配階層の權力政治以上のものをうちに含み得ることを見落すことが余りに多いのである。彼らは庶民を、また國民の間に subculture によつて形成される種種の集團が存在することを見失うのである。然るに事實はかかる人人が人口の基盤をなすのであり、彼らの價値觀や態度の變化が國家の政策に強い影響を與えるものなのである。

（了）

（筆者　米國イリノイ州イリノイ大學社會學人類學科・大學院教授）

附記　この論文の第一部は昭和三十一年七月二十五日、第二部は同じく八月八日、ともに京都アメリカ研究セミナーの講演として同志社大學學術館に於て行はれたものである。譯出には講演に通譯の勞を執られた同志社大學文學部社會學科、伊藤規矩治教授が自ら當られた。（編輯者）

前號目次

古代支那に於ける觀念論の成立……重澤　俊郎

幸福と人間の本質……岸畑　豐
——ベンタムの幸福の概念について(II)——

カントに於ける法と道德の分離について……土岐　邦夫

新着外國雜誌所載論文一覽

彙報

第三十八卷總目次

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

An Emerging World Culture

—Regularities in Culture Change—

By Julian H. Steward

(I) East and West: an Emerging World Culture

A new world culture is emerging as the necessary result of modern technological development. This new culture involves conflict, but it is conflict between past and present rather than between East and West. According to the author there was no such bifurcation. The idea "East and West" is an over-simplified generalization. There are so many societies within and between them. The modern industrial progress is quickly eliminating local differences and creating a new universal culture. The author enumerates interdependency of peoples and nations, linking of widely separated societies and emerging of a complex of closely interrelated technical and social features as main characteristics of this new world culture. This never means, however, reducing all people to a monotonus sameness. Instead, we are witnessing many a new subculture emerging as the result of industrialization.

(II) Cross-Cultural Regularities of Contemporary Change

In a succinct and clear form the author summarizes a methodology of anthropological field research, which is based on his own rich field experiences. In his project, "Study of Cross-Cultural Regularities of Change," one of his basic assumptions is that special segments of any

population will change in similar ways, if the same acculturative factors are introduced. This assumption derived from the results of his field research in Puerto Rico. Another of his important hypotheses is existence of several cross-cultural types independently emerging in widely separated areas as the result of specific sets of factors. If these assumptions are right, cultural change will be predictable to a certain extent. Hence practical value of anthropology. The author outlines his ambitious field research project, which covers Northwestern Mexico, the Central Andes, West East Africa and Japan. And he intimates the kinds of results he expects from his project. Of special interest and importance are his views on practicabilities of anthropology as an applied social science. He duly calls attention to an oft-neglected point in implementing technical aid programs for under-developed areas, that is, the importance of the subcultural groups that comprise the basic populations whose changing values and attitudes strongly affect national policy.

(S. Iwamura)

Réflexions sur la physique de Descartes.

par Kaichiro Yukawa

La méthode de Descartes est la méthode mathématique. Cette méthode se sert, dans l'analyse, des deux unités ; ≪magnitudo≫ et ≪multitudo≫. Ces deux unités correspondent, l'un et l'autre, aux orientations algébrique et géométrique de la méthode cartésienne. Dans ≪*Regulae*≫ les deux sont également qualifiées. Mais, dans la ≪*Géométrie*≫ la supériorité est donnée a l'orientation algébrique.

Quand il va s'occuper de la physique, Descartes est obligé d'introduire un élément nouveau dans sa méthode. C'est l'expérience sensible. Car il est impossible de traiter les objets de la physique avec l'entendement seul.